

小山仁示先生を偲ぶ

藪 田 貫

小山先生は昭和六年（一九三一）、和歌山県生まれ。昭和十八年大阪府立生野中学校に入学、同二十三年に卒業するが、新制の教育課程にしたがって大阪府立生野高等学校に編入し、翌二十四年卒業。その後、大阪大学文学部史学科に入学、二十八年に卒業。卒業後、大阪府立園芸高校教諭となる。教諭をしながら三十三年、大阪大学大学院日本史学専攻修士課程に進み、三十五年三月修了。修了後、市岡高校に転じるが、昭和四十一年（一九六六）四月、関西大学に講師として採用され、爾来、平成十三年（二〇〇一）三月まで、三十五年の長きにわたり、関西大学文学部に在職、後進の指導に当たった。

思いがけないことに三ヶ所で、先生の履歴と私の経歴が重なる。大阪府立生野高等学校、大阪大学文学部、関西大学文学部の三ヶ所である。生まれも育ちも違うが、まるで十七歳年長の先生の跡を追うかのように、わたしは高等学校・大学と進み、関西大学で教員として見えることになったのである。その意味で小山先生は、わたしの大先輩である。そんな先輩は、小山先生しかない。

平成二年（一九九〇）四月、関西大学文学部に移ったが、わたしの研究室は、先生の左隣であった。その至近距離に、先輩―後輩の気安さも手伝い、先生はかなりの頻度で隣のわたしの部屋をノックされた。「ヤブタクンネ」の一言で部屋に入ると、それこそ、いろいろな話をされた。一九九〇年当時、出ておられたABCテレビの早朝番組「おはよう朝日です」での「朝刊拾い読み」のこと、先生の分身であったといえるピース大阪の行く末、委員長と事務局長を立て続にされた大阪歴史学会のこと、先輩である有坂隆道先生や津田秀夫先生のこと、『大阪大空襲 大阪が壊滅した日』が毎日出版文化賞にノミネートされながら賞を射止められなかったことなど、実にいろいろな話を聞いた。わたしが関西大学に採用されるに当たって書かれた業績審査書のコピーを見せる、というオマケもあった。そんな立ち話のなかで、忘れたい一言がある。西淀川公害裁判などの社会活動が多忙であったことに加え、やがて来る定年を意識されていたのか、関大に勤めて二年ほどたった頃、「大学院生のごとは君に任せろ」と言われたのである。そのお蔭で着任後、近世史専攻の院生と始めていた研究会「セロリの会」に、近代史専攻の院生が加わり、セロリの会は、一気に活況を呈した。それは、「関大

教授として自立せよ」との親心ではなかったかと想う。わたしもすでに定年前にする年齢に達したが、先生のこの配慮によって、わたしの関大生活が充実したものになったことは間違いない。あらためて感謝の念でいっぱいである。

隣の部屋を訪ねるとき先生は、しばしば本を持って現れた。刷りたての著書をわたしに、手づから与えられたのである。この原稿を書き目の前には、『大阪府の百年』（芝村篤樹氏との共著）、『戦争 差別 公害』、『米軍資料日本空襲の全容』が並んでいる。先生みずから、代表的著書という『大阪大空襲 大阪が壊滅した日』と『西淀川公害』も研究室にあるはずだ。いずれも、先生が五〇歳代から六〇歳代にかけて渾身を込めて書き上げられた作品である。

そんな著書群の傍らに、一九七八年七月八日の奥付を持つ一冊の本が立っている。『朋友の碑』である。「大阪府立生野中学校二十四期生卒業三〇周年記念」と副題が付けられている。一九七八年といえば、先生四十七歳の頃のものである。わたしが関西大学に着任したのが一九九〇年であるから、十二年も前の作品である。それをわたしは、隣の研究室の先生から貰ったのである。生野中学―生野高校の先輩としての好意であることは、いうまでもない。

浅黄色のブックカバーに白二本の線が入り、四本のヒマラヤ杉（これはわたしの判断）が立つ図柄に大きく「朋友の碑」とあり、碑には「いしぶみ」と仮名が振ってある。四本のヒマラヤ杉は、昭和二十年（一九四五）六月七日の大阪大空襲で命を落とした学友四名であることは、本を紐解けば一目瞭然である。A五版四五一頁からなるこの本の編集と校正に先生は、同級生藤井直正氏とともに当たったのである。

冒頭「はじめに」に、こんな一文がある。

電話がかかり、梅田で会う約束の出来た小山君は、あのころ、ともに同じ町内で六月十五日の空襲の時には、少年として二人だけ最後まで真黒な煙と真赤な猛火の中に踏み止まり、わが町を救おうとした猪飼野の若き親衛隊同志でありました。彼は一生懸命勉強しました。学問に人生をかけました。そして今では関西大学の歴史学の教授だと言うその彼が「岡本君、記録を作り、本にしたらどうや」と教えてくれたのです。私はその時、まだ話さえ出来ていないのにオーバーな言い方をすれば、「救われた」ような気がしたのです。これだ、これこそ四人と我々の記念碑だと思いました。

一方「あとがき」には、「四人の友のための鎮魂の詩としたいという一念ではありますが、同時に失われていく記憶を後の世代、息子や娘たち、生野高校の後輩たちに語りつぎたいとも思うのです」とある。わたしはまさに、その一人なのである。その一人として十一年間、関西大学で研究室を隣り合わせにしたのである。小山仁示先生の後輩であったことは、私の人生にとって大いなる僥倖であった。